

まちづくりコミュニティの構造分析 その2

2つのコミュニティ比較と調査対象者へのフィードバックによる検証

正会員 ○ 藪谷 祐介 *1
同 中原 宏 *2
同 齊藤 雅也 *3

まちづくりコミュニティ 構成員 役割
構造分析 コレスポネンズ分析

1. はじめに

前稿その1で、「大子町屋台研究会」をケーススタディとして、まちづくりコミュニティの構造分析を試みた。本稿では、前稿の比較対象としてまちづくりコミュニティ「結いプロジェクト」の分析、および調査対象者へのフィードバックにより、調査方法の検証を行う。

2. 結いプロジェクト

1) 概要

「結いプロジェクト」は、茨城県結城市で活動するまちづくりコミュニティである。2010年に発足し、まちの空き家・空き店舗を活用した「結い市」や「結いのおと」というクラフト市、まちなか音楽イベントを年2回行うことで、まちの活性化を目指している。

2) 構成員の特徴

15名を対象に調査を実施し、13名の回答を得た(回収率86.7%)。アンケート調査1とエゴグラムの結果を表1にまとめた。「大子町屋台研究会」と異なり、すべて20・30代で構成された同世代型コミュニティである。

表1 構成員の特徴

No.	性別	年齢	職業	所属グループ数	居住地地域数	参加年度	モチベーション	グループ貢献度	自身の貢献度	エゴグラム
001	男	30	会社員	3	1	2012	所属と愛の欲求	80	70	A
002	男	30	団体職員(一般事務)	1	1	2010	自己実現欲求	100	98	FC
003	男	20	自営業 Web関連	2	3	2012	自己実現欲求	70	50	A
004	女	20	会社員	1	3	2013	所属と愛の欲求	30	30	FC
005	女	30	会社員	2	1	2010	承認の欲求	85	60	A
013	男	20	公務員	4	2	2010	自己実現欲求	95	60	NP
015	女	20	学生	10	3	2011	所属と愛の欲求	75	15	NP
平均		28.7		3.0	2.6	2011.3		82.8	59.4	
標準偏差		4.7		2.4	1.4	1.1		21.1	23.2	

3) 構成員の役割による類型の視覚化

コレスポネンズ分析を用いて、「結いプロジェクト」の構成員(1~15)と役割をプロットした布置図を作成した(図1)。布置された役割から、横軸が<資産の提供-労働力の提供>軸、縦軸が<行動性-思考性>軸であると考えた。また、クラスター分析を用いて構成員を5つに類型化し、類型ごとにレーダーチャートを作成した(図2)。それにより各類型を、①オールマイティなリーダー(2名)、②情報発信をする知識・技術・アイデアの提供者(3名)、③協力的な裏方調整役(5名)、④知識・技術の提供者(2名)、⑤ムードメーカー(3名)とした。キーパーソンは①、②、③に集中しており、これらはコミュニティ内において特に重要な役割を担っていると考えられる。また、リーダーがあらゆる役割を担っているのが特徴的である。

4) 構成員の特徴と役割の関係

①の2人は設立時から参加し、まちを良くしたいという自己実現の欲求から参加している。これまでの居住地地域数も少ないことからまちへの想いが強いことが推察できる。②の3名は、デザイン等の専門職である。③の3名は他の

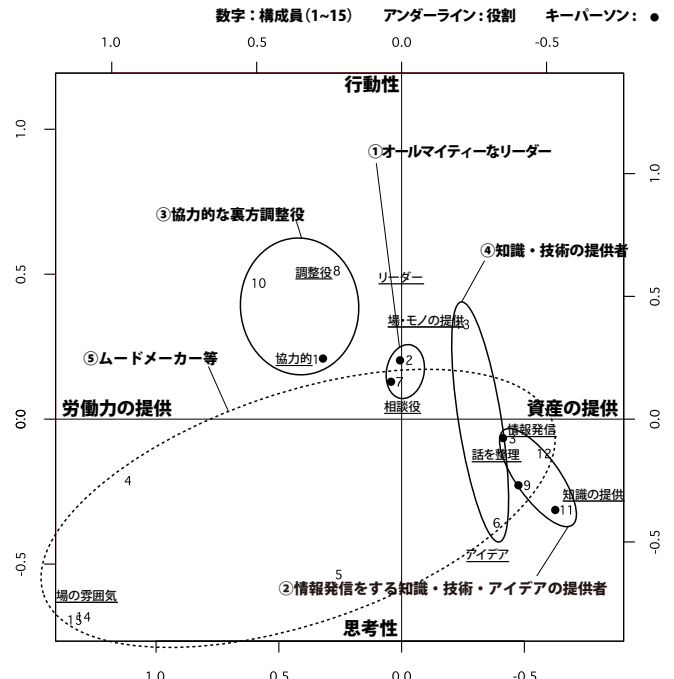


図1 構成員・役割同時布置図

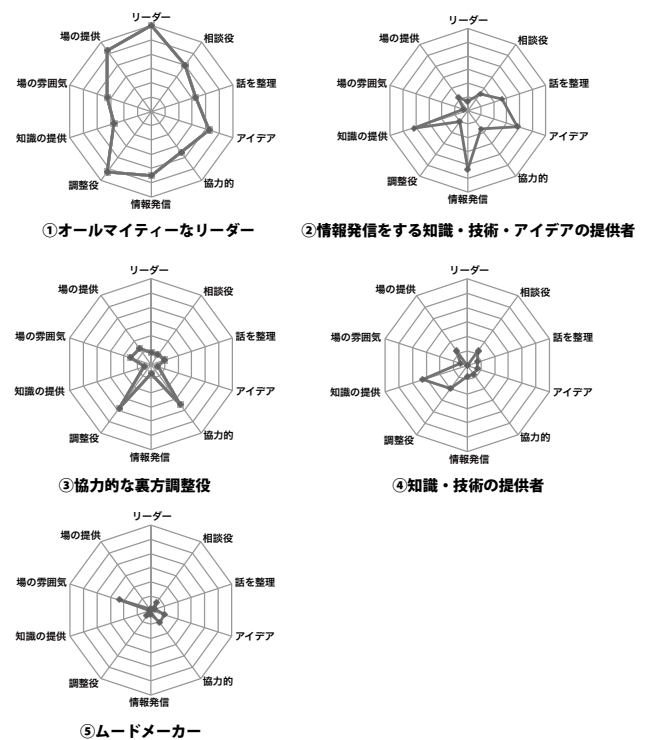


図2 類型別役割レーダーチャート

Structural Analysis on the Community Action Groups Part 2
Verification of Survey Methods by Comparison of two
Communities and Feedback to Survey Respondents

YABUTANI Yusuke, NAKAHARA Hiroshi, SAITO Masaya

構成員との活動を楽しむ等の所属と愛の欲求から活動に参加している。④、⑤の構成員には共通の特徴はなかった。

3. 2つのコミュニティ比較

その1で分析した「太子町研究会」と「結いプロジェクト」の分析結果を比較した。布置図は、各コミュニティともに、横軸が<資産の提供-労働力の提供>軸、縦軸が<行動性-思考性>軸と設定することができた。①のリーダーについては、「太子町屋台研究会」は思考性の高いところに位置するのにに対し、「結いプロジェクト」は行動性の高いところに位置している。これは各コミュニティのリーダーの役割が異なることを示しており、このことはレーダーチャートからも読み取ることができる。このように、各コミュニティの布置図とレーダーチャートを比較することにより、その特徴を把握できる。

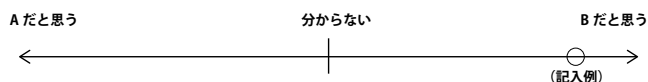
4. 調査対象者へのフィードバックによる検証

1) 調査方法

2つのコミュニティのキーパーソン9名（「太子町屋台研究会」5名、「結いプロジェクト」4名）を対象に、a) 分析結果の実証性と b) 有用性の把握、c) 調査項目の精査を目的に構造化インタビューを下記の手順で実施した。

a) 分析結果の実証性

2つのコミュニティの分析結果（布置図とレーダーチャート）をコミュニティ名を伏せた状態で示し、どちらが自身のコミュニティか、図3の軸に○印をつけてもらう。



b) 分析結果の有用性に対する回答軸

a) の分析結果を示す前に、所属するコミュニティの課題について質問する。次に、分析結果を示した後、分析結果からの新しい気づきや分析結果が今後のコミュニティ活動に役立つかどうかを質問する。

c) 調査項目の精査

アンケート調査用紙1、2を示し、回答しづらい項目、モチベーションや役割の選択肢の過不足の有無について質問する。

2) 分析結果の実証性

正答率は78%であった（図4）。また、正答者の○印の位置から回答に対する自信を分析すると、平均66%の自身を持って回答していた。このように、多数の構成員が分析結果を理解した上で正答していることから、実証性は担保できたと考えられる。

3) 分析結果の有用性

図4に示すように、コ

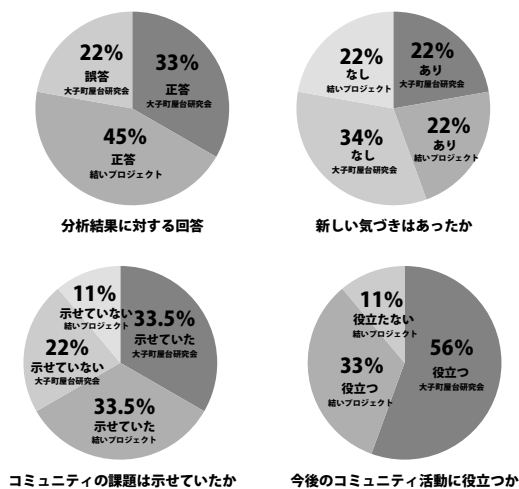


図4 各質問項目に対する回答別割合

コミュニティの課題は70%が「示している」と回答し、新しい気づきは44%が「あり」と回答した。これらは、コミュニティの役割分担に対する認識が各構成員によって異なっていることを示している。認識を共有することはコミュニティ活動を行う上で重要であり、本分析結果がコミュニティ活動に役立つ可能性を示している。また、89%が今後のコミュニティ活動に「役立つ」と回答した。具体的には、「弱い部分を分析し改善に役立てる」「他者に説明するのに役立つ」「他者評価による自分の役割を自覚できる」「変化をみることができる」の4つの内容の意見があり（表2）、専門家のみならずコミュニティ活動の構成員にとっても有用な情報となり得る。

4) アンケート調査1の精査

モチベーションの項目としては、新たに「仕事に役立つ」という意見が得られた（表2）。

5) アンケート調査2の精査

「後から参加した構成員や参加していない構成員は分からない」「自分を評価しづらい」「最大回答可能数の5名より多いところがあった」という意見があった。分からない構成員は回答が実情と異なる可能性はあるが、2)で述べた通り、実証性が担保できていることから、すべての構成員から回答を得ることで、信頼性の高いデータと考えられる。また、自分を評価しづらいや最大回答可能数についての意見に対しては、誤差を生じる原因となり得るため、他者のみを評価する方法、最大回答数を設定しない方法を今後検討する。

5. まとめ

2つのまちづくりコミュニティを比較することにより、<資産の提供-労働力の提供>軸、縦軸が<行動性-思考性>軸で評価できる可能性と、布置図とレーダーチャートによってコミュニティの特徴を把握する方法論を示した。また、調査対象者へのフィードバックにより、分析結果の実証性と有用性を示すとともに、調査方法の再検討項目についての知見を得た。今後は調査対象数を増やして検証を続け、構造分析手法の開発を目指す。

表2 各質問項目に対する回答内容

b) 分析結果の有用性
分析結果はコミュニティにどのように役立つか
<ul style="list-style-type: none"> ・弱い部分を分析し改善に役立てる (7) ・他者に説明するのに役立つ (2) ・他者評価による自分の役割を自覚できる (4) ・変化をみることができる (1)
c) 調査項目の精査：アンケート1
モチベーションで足りない項目
<ul style="list-style-type: none"> ・仕事の役に立つ (1)
c) 調査項目の精査：アンケート2
答えづらい役割の項目
<ul style="list-style-type: none"> ・後から参加した構成員や参加していない構成員は分からない (2) ・自分を評価しづらい (2) ・最大回答可能数の5名より多いところがあった (1)
役割で足りない項目
<ul style="list-style-type: none"> ・協力者を連れてきてくれる (1) ・主体的に企画をする (1)

() 内数字は回答数を表す

*1 札幌市立大学教育支援プロジェクトセンター
特任助教・修士（デザイン学）
*2 同大学デザイン学部 教授・工博
*3 同大学デザイン学部 准教授・博士（工学）

*1 Project Assist. Prof., Educational Project Center,
Sapporo City Univ., M.Design
*2 Prof., School of Design, Sapporo City Univ., Dr.Eng.
*3 Assoc. Prof., School of Design, Sapporo City Univ., Dr.Eng.